
離れられない愛

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

離れられない愛

【Nコード】

N1398I

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

フランチェスカとロレンツォはこのうえなく愛し合っていた。その愛しいフランチェスカが亡くなった時ロレンツォがしたこととは。ルネサンス時代を舞台とした恋愛ものです。

第一章

離れられない愛

「永遠よ」

「勿論だよ」

フランチェスカは黒い髪に瞳を持っている可憐な女だった。まるで百合のように儂い外見をしており今にも折れそうな姿をしている。そしてロレンツォは金髪に青い目をしており長身で逞しい身体をしている。まるで太陽のように澆刺とした輝かしい美貌を持っている青年であった。

二人は幼い頃から常に一緒にいて共に遊んでいた。その彼等の仲は誰にも裂くことのできないものになっていた。それは両家の者達も同じであった。

「今のところ事情が変わっていないのでいいが」
「そうですね」
ガエターノ家でもアラゴーナ家でも多少困惑しながら話が為されていた。

「事情が変わって二人を分けることになる」と
「どうしたものでしょうか」
「今となっては無理だ」
二人の父親達はどちらもこう考えていた。

「最早な。それは」

「分けることはできませんか」

「分ければ間違いなく自ら命を絶つ」

そしてこう予想するのだった。

「その時はな」

「ではどうしてもですね」

「カプレーティ家とモンテッキ家悲劇は聞いている」

この話は当時のイタリヤに広く伝わっていた話だ。敵対する双方の家の子弟達が惹かれ合いそうして命を絶った。その話は彼等も知っていたのだ。

「それはな」

「ではやはり」

「幸い我等の関係は良好なままだ」

どちらの父親も言った。

「ならばだ。このまま結ばせる」

「はい。それでは」

こうして彼等は結ばれることになった。ロレンツォもフランチェスカも華やかな婚礼の式の中で幸せに結ばれた。二人の幸せな生活はここからはじまった。

二人はいつも共にいた。朝も昼も夜も共にいた。書を読むのも乗馬をするのも狩りをするのも共に行った。フランチェスカは本来は狩り等は得意ではなかった。ロレンツォは読書をするタイプではなかった。しかしそれでも彼等はお互い仲睦まじく共にいた。

当然寝食も同じだ。政務の時もロレンツォはフランチェスカを側に置いていた。幸いにして彼女は賢明にして慎重深く普段はそっとそこにいるだけで機を見て夫に耳打ちする。その耳打ちが実に的確でありそれによって夫を助けていったのである。

二人の関係はまさに水魚の交わりであった。子供達が生まれ幸せな生活は続いた。しかし幸せは永遠には続かない。歳月が経ちフランチェスカは病に倒れた。もう初老の歳になっていた彼女は身体を弱くさせてしまっていたのだ。まだその美貌は健在だったが。

「すぐによくなる」

その彼女の枕元でロレンツォは優しく言った。

「すぐにな。安心していい」

「いえ、それはわかるわ」

しかし彼女は穏やかに微笑んで枕元に座っている夫に告げた。

「自分のことはね」

「まさかとは思うが」

「ええ。もうすぐね」

その穏やかな微笑を夫にも向けての言葉だった。

「もうすぐ。私は」

「そんなことは有り得ない」

ロレンツォはその言葉を必死に否定した。

「絶対に。有り得ない」

「私が死ぬということが？」

「君は死なない」

彼はそれを否定し続ける。

第二章

「そう、何があろうともそれはないから」

「私もそう思いたいわ」

しかしその声は弱々しいものだった。

「けれどね。それはもう」

「そんな、私は君がいないと」

「あなた」

フランチェスカはその夫に対してまた声をかけてきた。

「今まで有り難う」

「有り難う………」

「私は先に逝くわ」

やはり死を感じている言葉だった。これは変わらない。

「けれどね。それでも」

「それでも。何だい？」

「私はいつもあなたと一緒にいたいわ」

こう夫に話すのだった。

「一緒にね」

「そう。一緒に」

「死んでも。それでも」

共にいたいというのである。

「いたいから。それだけ聞き遂げてくれるかしら」

「うん、いいよ」

ロレンツォも妻のその言葉に頷いた。若い頃の澁刺とした美しさがそのまま残った顔で。その顔には髭はない。若い頃の思い出をそのままにする為に剃っているのである。

「じゃあ。私達は」

「何時までも。一緒に」

こう言い残しそのうえでフランチェスカはこの世を去った。ロレ

ンツォはそれを見届けるとすぐに家臣達に命じたのであった。その命令とは。

「まずは画家を集めてくれ」

「画家をですか」

「そうだ。そして彫刻家もだ」

それも集めよというのだった。

「それは同じでもいい。いいな」

「画家に彫刻家ですか」

「すぐにですね」

「このイタリア半島にいる優れた画家や彫刻家を全て集めるのだ」
彼はこうも告げた。

「いいな。すぐにだ」

「はい、それではすぐに」

「そう致します」

こうしてイタリア中から実際に著名な画家及び彫刻家が集められた。その中にはあのレオナルド・ダ・ビンチもいたしミケランジェロもいた。そしてラファエロも。何と彼等は同じ時期にロレンツォの屋敷に招かれることとなったのであった。

「全く。因果なことだな」

「本当にな」

ダ・ビンチとミケランジェロはお互いに顔を見合わせると早速不機嫌な顔を見せ合った。

「あんたと一緒の場所で仕事をするとはな」

「話を聞いて止めようかとも思ったぞ」

ミケランジェロはその鼻が曲がった赤い髪と髭の顔でダ・ビンチに言い返した。

「しかしわしは彫刻だ」

「わしは絵だ」

ダ・ビンチもその白い髭を長く伸ばした顔で言う。

「描かせてもらう」

「あんたのそれには負けんぞ」

ミケランジェロはもうライバル意識を見せていた。

「君にもな」

「私は絵でも彫刻でもありませんけれどね」

ミケランジェロに声をかけられた若い男が彼に返してきた。ミケランジェロに対しては睨んでいるがダッビンチには好意的な目を見せている。

「あるものを作らせてもらいます」

「あるものとは？」

「それは作られてからのお楽しみです」

その若者ラファエロは今はそれを言おうとはしなかった。

「しかし」

「しかし？」

「どうしたというのだね」

ミケランジェロだけでなくダッビンチも彼に問うた。

「いえ。この仕事は必ず実りのあるものになります」

ラファエロは二人に対して微笑んで述べるのであった。

「必ずや」

「そうだな。わしもそう思う」

「私もだ」

このことについてはダッビンチもミケランジェロも同じ考えであった。彼等も今回引き受ける仕事は必ず実りあるものになると確信していた。

「それではだ。早速取り掛かるか」

「あんたには負けんぞ」

ミケランジェロは早速ダッビンチにライバル心を剥き出しにしていた。ラファエロはそんな彼を苦々しい顔で見ていた。彼等の関係は仕事とは別にこのままだった。

第三章

ダ・ビンチは絵画を、ミケランジェロは彫刻をそれぞれ作っていく。他の画家や彫刻家達も同じように作っていく。そしてラファエロは。

「これで宜しいですね」

「うむ」

館の主であるロレンツォは彼に対して頷いていた。

「これでいい」

「そうですか。御気に召されたようで何よりです」

彼はロレンツォが満足した顔で頷いたのを見て彼もまた会心の顔になった。

「それではこのまま」

「作ってくれ」

またラファエロに告げるロレンツォだった。

「このままな。頼んだぞ」

「はい」

ラファエロはそれを作っていた。かなりの歳月と莫大な費用が費やされそのうえで遂に完成した。ロレンツォはそれが全て完成した時に言った。

「これでいい」

「これでいいのですね」

「そうだ。有り難う」

そして彼の後ろに集まっていた芸術家達に対して述べる。そこにはダ・ビンチもいればミケランジェロもいる。ラファエロも熱を帯びたような顔になっていたがそれでもいた。

「これこそが私の望んでいたものだ」

「そうですか。これが」

「貴方の望まれていたものですか」

「その通りだ。これで私達は常に共にある」

彼はまた芸術家達に告げた。

「有り難う。報酬は弾むよ」

こう言って館の中に入る。ダ||ビンチはそんな彼の後ろ姿を見ながら。呟くのだった。

「思えば人というものは不思議だ」

「今更何を言っている」

そのダ||ビンチに対してミケランジェロが声をかけてきた。

「そんなことは最初からわかっていることだ」

「人が不思議だということがか？」

「そうだ。だからわしは全ての仕事をしているのだ」

ダ||ビンチは後世では万能の天才と呼ばれている。しかしミケランジェロもまたそうなのだ。彼もまた万能の天才と言うべき人物なのだ。だからこそ様々な仕事をしているのだ。

「その不思議なものを見極める為にな」

「ふむ。それは私も同じだがな」

「では何故今そんなことを言ったのだ？」

「あの館を見てだ」

ダ||ビンチは今度は館を見た。それは宮殿を思わせるリツパなものである。そして庭を見ればそこには大理石で作られた彫刻があった。

多くの彫刻がある。それはどれもフランチエスカであった。時にはギリシアの女神の服を着ており時には着飾っている。全てが彼女であった。

「あの中もな」

「あんたの絵もあるな」

「貴殿の彫刻もな」

彼等の作ったものが全て館を飾っているのである。館の中は全てそれで満たされている。そしてここでラファエロも言うのだった。

「それで私ですが」

「あんたは何をしたんだ？」

ミケランジェロは今度はラファエロに対して問うた。

「それで」

「寝室を作ったんですよ」

こうミケランジェロに答えるのだった。

「寝室をです」

「ロレンツォ様のか」

「そうです」

少しふらふらとしているようだったがそれでも言うのだった。

「それを作ったんですよ」

「ではそこもまた」

「その通りです。壁にも天井にもフランチェスカ様がおられます」
つまり絵画にしたのである。

「そして彫刻も置いています」

「ロレンツォ様は君に自らが休まれる場所を任せたのだな」

ダッビンチはそれを聞いて述べた。

「そういうことか」

「はい、とても有り難いことに」

ラファエロはその赤くなってしまうっている顔で答えた。

「それで私の全てを込めて作りました」

「そうか。それはいいことだな」

偏屈だと評判のミケランジェロもこの時ばかりは素直な言葉を出した。

「ロレンツォ様も喜ばれる」

「はい、そう思います」

「あの方はあの館で一生を過ごされる」

ダッビンチは述べた。

「そう、これから」

「そうだな。フランチェスカ様と共に」

ミケランジェロは館の門の入り口の左右に置かれているフランチ

エスカの像を見た。それはそれぞれギリシアのアテナの鎧兜を身に着けていた。

この二つの彫像もまた彼が作ったものである。館の中にあるものだけではなかったのだ。k彼が作ったものは。

「おられるのだな」

「人は多くの罪も犯す」

ダIIビンチはまた言った。

「しかしだ。時としてこうしたこともする。その想い故にな」

そうしてまたその館を見るのだった。館の中では今ロレンツォが満ち足りた顔で中を見回していた。彼は一人恍惚として呟いていた。

「フランチェスカ」

妻の名であった。

「これで私達は。何時までも一緒だよ」

その恍惚とした顔で館の中を歩き回りながら至る場所にある彫刻や絵画を見て回るのだった。それはどれもフランチェスカの姿であった。

この館は現在も残っている。ロレンツォはこの館で生涯を過ごし亡くなったのは自身の寝室であった。ラファエロが絵画と彫刻を残したその部屋もまた今もある。

全てがフランチェスカで彩られたこの館からはロレンツォの想いが感じられる。これを狂気と呼ぶか純愛と呼ぶかは人によってそれぞれであろうか。

しかしこれだけは言える。ロレンツォは生涯フランチェスカだけを愛していた。そうしてその愛がこの館を作らせたのである。今二人は並んでこの館の端に眠っている。二人はその眠る場所も同じであるのだ。少なくとも二人は幸せであると言ってもいいであろう。

離れられない愛

完

2
0
0
9
•
6
•
2
3

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1398i/>

離れられない愛

2010年10月8日15時04分発行